
魔法少女リリカルなのは ～時を巡るモノ～

前々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～時を巡るモノ～

【Nコード】

N5000N

【作者名】

前々

【あらすじ】

ある日、流星群の不思議な光を浴び、不思議な力を得た青年。これは、そんな青年が魔法という力を持った少女たちとの、出会いや別れ。友情や愛憎などを描いた青春物語……ではない。

“魔法少女リリカルなのは”のオリジナル主人公（以下“オリ主”）モノです。

この作品にはオリ主と原作キャラとの友情以上、恋人未満。果ては恋仲といった関係ができていますので、そういったモノが苦手、嫌

悪感を抱くといった人は精神衛生上見ない方がよろしいかと思われます。

また、性的な表現が過激ではないですが、あつたりしますので、それらが苦手、あるいは駄目、といった方はご遠慮ください。

第一話 八神家へようこそ

俺の名前は穂守^{ほがみ} 桂介^{けいすけ}。

ワケあって、ある女の子の家に居候をしている。

それは語るも涙。聞くと涙のお話なんだが…。

いや、今は言うまい。きっと、しかるべき時が来たら話す機会もあるだろう。

そんなこんなで、この女の子… “八神^{やがみ} はやて” というんだが、その娘の家に居候をし始めて… そうだな、もう結構な時間が経つ。

時が経つのは早いもんだ。

目を閉じれば思い出す。

はやてがまだオネショを隠していた時期をな…。

それを思い出せば…。

「立派になったもんだ…」

まだ幼児体型だが、それはコレからの成長しだいだろう。うん。

「それで、お兄いの遺言は全てやな…」

そう言うてはやては傍に置いてあった、お徳用入浴剤＜ラベンダーの香り＞を、力いっぱい俺に投げつけていた。

お徳用だけあって大きい業務用のようなサイズの、しかも中身もたっぷりと詰まった缶の一撃は、俺の意識を沈めるのに充分であった。

ああ…ただ、手を洗おうと洗面所に入っただけだったんだがなあ…
…。

下着姿（半脱ぎ）のはやてに出会うなんてなあ…。

「まったく…入ってくるならノックくらいするもんやろ…。」

「あい、すんまへん…」

変な言葉遣いになっているが勘弁して欲しい。口の中が切れていて、喋るだけでもけっこう痛むんだ。

「自業自得やろ」

はやての話では、今日も暑かったのでシャワーを浴びて汗を流したかったらしい。

実際、今は真夏も真夏。世間では夏休みでチビっ子たちが大喜びしている時期だ。汗をかくのは致し方ないといえよう。

はやての家は、彼女の身体的な事情の事もあってか、けっこうバリアフリーなどの部分がしっかりとされている。

なので、車椅子さえあれば一通りの家事や移動なども問題なく行えるので、彼女自身も家の中では結構好き勝手にしている。

実際、家事も炊事関係は俺よりも出来るくらいだ。

まあ、結果的にそれだけ動けば汗もかくだろう。シャワーを浴びるのは理解できた。

「ほな、お兄いも反省したみたいやし…ご飯にしょか」

「わーい」

なんとか許してもらえたので、正座から立ち上がる。

おお、足が痺れてるぜ…。

「お兄い。手伝ってな」

「任しとけ、今日も残さず食べ尽くすぜ！」

「食べる方じゃなくて、料理の手伝いや…」

呆れながら苦笑するはやての車椅子を押す。

いつもどおりの我が家の光景であった。

第一話 八神家へようこそ（後書き）

はい。“ネギま”だけでは懲りずにリリカルでも書きたくなって書いてしまいました。ダメ作者です。

相変わらずの微妙な話を、ちょこちょこ書いて晒していくつもりです。

人気作なので、他の作者さん達とネタが被らないように頑張るつもりですが、もし「ココ危ないんじゃない？」というモノが見つかりましたら教えてください。

第二話 男とは恋愛と言う名の幻想に憧れる生き物である

「もおー！ お兄にい！！ ウチが楽しみにしてた翠屋のケーキ食べたの、お兄いやろー！！」

「なに！？ 馬鹿を言うな！ 俺だって楽しみにしてたんだ！」

「そんなん聞きたかった訳やないー！！」

八神家と書かれた表札の家にて、今日も仲の良い男女の声が響く。
やがみ

中には、二十歳くらいの男と十歳くらいの少女が言い合いを続けていた。

「そんな調子やから、いまだに彼女の1人も出来んのや！」

少女の名前は、八神はやてといい、この家の主でもある。

車椅子に乗っているの、下半身が悪いのだが……正直、病人であるのだという事が疑問になるくらい元気な少女だった。

「か、彼女がいない訳じゃないぞ」

少女の前に立つ男、穂^ほ守^{がみけいすけ}桂介。数年前から、彼女の家に居候している青年である。

「ふん！ 彼女がいるなら年がら年中、家にいる訳ないやろ！」

「いいや！ 彼女はいたんだ！ 今はちょっと連絡が着かなくなっただけで……」

「それは、どんぐらい着かないねん？」

「……半年」

「…それ、もう捨てられとるわ」

「うわあー！？ 直視したくなかった現実がー！！」

現実という言葉の重みに、押しつぶされそうな表情で、彼は膝をついた。

それから、膝を抱えて小さくなっていく。

「俺だって、若干そうじゃないかって思ってたんだよな。誕生日ん時も何もくれなかったし…。電話しても、いつも繋がらないし…。結局、えちい事だって出来なかったし……。むしろ、今思えばデートすらまともに出来てなかったような……………」

次から次へと負の記憶が連想され思い出されていくが、当然どれもこれも、あまり良い思い出ではなかった。

負の連鎖に陥っていく男の姿を見て小女は、「マズイ事言ってもうた…」と、自分の発言に何故か逆に悪い気分になってしまっていた。根は良い娘なんです。

「だ、大丈夫やって…。お兄いは誤解されやすいだけで、悪い人やないし……」

「……」

「きっと、お兄いの事を心から好きになってくれる人が、その内現れてくれるはずや」

「…そうかな？」

「そうやって。お兄いの魅力は身近にいたウチが一番分かつとる。大丈夫や」

「…そうか。うん。そうだな」

青年は、少女の言葉に顔を上げると、ゆっくりと立ち上がり、少女の手をとった。

「ありがとう、はやて…。俺、頑張るよ！」

「うん。頑張ってな、お兄い」

こうして、今日も八神家では平和な一日が過ぎていくのであった。

第二話 男とは恋愛と言う名の幻想に憧れる生き物である (後書き)

関西弁……難しい。

所々、間違っているような気がする。

……精進します。

あ、ちなみにこの主人公はもう一つの作品の彼とは何の関係もないので、あしからず…。

第三話 この時の三分間をいつも以上に長く感じるのは、俺だけでは無い筈

「ふっふっふ…ついにこの時がきた…」

俺は今人生最大の瞬間を迎えようとしている。今までに何度も経験したこの感覚、この高揚感、そしてこの焦燥感が俺を際限なく苛む。

「あと…一分」

ついに長き眠りともいえるこの耐え忍んでいた時間も終わりを迎える。

そして時間が残り十秒をきった時、俺は確信した。

今日も完璧だ、と……。

待ちに待った蓋を開けると、中から白い湯気が“ソレ”を包む。

中では、並々と数多の引き立て役たちが“ソレ”を覆い隠している為、その存在を感じることは出来ない。

だが、そのもどかしさが期待を膨らませる。

俺は箸でそれらを掻き混ぜ、主役の“ソレ”を引き上げる。勿論、引き立て役の彼らも共に絡ませるのも忘れずに…。

そして、おもむろに“ソレ”らを眼前へと、持ってくる。

「…いただきます」

言葉はもはや意味を成さない。

しかし、ソレを目の前にしては、感謝を告げるしかない。

そして、感謝を告げながら思うのだ。

今はただ、目の前の“ソレ”と真剣に向き合いたい、と。

ズルズルと目の前のカップ麺から“ソレ”……主役の麺を、具と一緒に頂く。

程よい固さは時間調節の賜物だ。

無我夢中で熱く濃厚なスープにからまった麺を頂く。

具のチャーシューや野菜類がそれぞれの旨味を麺と調和しながら俺の舌を刺激し、快感となって脳へと送られる。

やがて、快感は満腹感という名の幸福へと変わり、俺はみっともな

くも……一つ、ため息をこぼすのだ。

「…美味かった」

俺は、今この世界で一番の幸福を感じている。

ああ…これが至福なのだ、と……。

「…相変わらず、とても美味しそうに食べるなあ」

義妹^{はやて}がこちらを見ながら感心するようにそう呟く。

悪いが、今の俺にはこの幸福感から逃れられる術^{すべ}を持たないのだ。

もう少しだけこの幸福感に浸らせてくれ。

「いや、まあ…ええんやけどね……」

はやては、「アタシも食べよ」と言って台所へと向かう。

そして俺の秘蔵のラーメン、s倉庫から一つを取り出すと、おもむろに一つを開けてお湯を注いでいく。

「あ！？　ソレは俺が楽しみに取っておいた、“博多の親父が兜を脱いだ、秘伝の味噌ラーメン”！！！」

「コレ前から狙ってたんよ」

「待て、はやて！　それ限定モノでもう手に入らんのだぞ！？」

「あ、そうなんや。良かった。失くなる前に食べられて」

「俺が食えないだろ！！」

それから俺とはやては限定ラーメンを掛けて壮絶な大勝負をするのだが、コレはまた別の話である。

第三話 この時の三分間をいつも以上に長く感じるのは、俺だけでは無い筈（後

美味いラーメンが食べたい。

あ… “バリカタ” をお願いします。

第四話 白い服を着た集団…コレだけじゃ、怖い集団だな

「あ、桂介さん。こんにちはなの」

「おお、白いチビっ子。こんにちは」

今日は居候先の家主からの使いで、買い物帰りだ。

ここは商店街と家の間にある大きな公園で、海が近いのが特徴だ。

俺は、その公園の中を横断して買い物に行くのがいつものお決まりのコースなんだが、ある日をキッカケに白い少女たちに会う事が多かった。

きっと、少女たちの下校時間と被るのだろう。

少女たちはお揃いの白い服を着ていて、最初は怪しい宗教団体かとも思ったが……どうやらただの学生らしい。

怪しい宗教に入っているのか？ と尋ねると、ツンツンしてる少女が怒りながら説明してくれた。

「ん？ 少女は今日は一人なのだな」

「え？ あ、そうなの。アリサちゃんもすずかちゃんも塾があるか

ら…」

「で、オマエ一人だけ、ぼっちになってるのか…」

「ぼっち…?」

「…聞かなかった事にしてくれ」

ぼっちの説明なんて、心が寂しくなるからな…。

「そういえば、少女って呼んでるけど……。なのは名前まだ覚えてないの?」

「いや、知ってるぞ。なのはだろ?」

フツ……。

馬鹿め。

自分から言ってやがるぜ、コイツ。

「…今、なのはが自分で言ったの」

……読まれてやがる。

恐ろしいガキだ。

「…言う前から知ってましたよ？」

「何で、目逸らすの？」

「……生まれつきなんだ」

その後、少女……もとい、なのは嬢が許してくれるまで、延々と追求される羽目になった。

超、面倒くさかった。

「あ~~~~~！ 頼んでた野菜買い忘れてるやん！！」

その後、帰ったら家主からも怒られた。

散々な一日だった。

第四話 白い服を着た集団…コレだけじゃ、怖い集団だな（後書き）

なのはの口調がおかしくなかった？

……俺もそんな気がする。

第五話 対G戦。くはやて家の攻防く

「あ、あ、お兄い！ ソツチ行つた!!」

「よっしゃ！ 任せろ。往生せいやあああああああつ!!」

台所にGが現われた。

はやてのこうげき。

ミス。こうげきは当たらなかった。

Gはにげだした。

しかし、まわりこまれてしまった。

桂介の、こうげき。

かいしんのいちげき。

Gをたおした。

しかし、けいけんちとおかねは、手にはいらなかった。

「……熱い戦いだったぜ」

はやて家のリビング。

そこで、一組の男と少女が向き合う。

今日は、月に一回（不定期）の家族会議である。

はやては、ホワイトボードを取り出すと本日のお題を書き出す。

そこには、“対G戦について”と書かれていた。

「迂闊やった。まだ大丈夫やと思ってたけど…相手をみくびってたわ」

「確かに…。まだまだ寒い日が続いてたからな…」

冬の間はあまり見る事がない黒い悪魔こと“G”。

しかし、家では暖房が入っていて比較的温かいせいだろうか？

久方ぶりに発見。はやてと一緒に戦闘へと入ったのだ。

きつと過ぎしやすい場所に自然と集まってくるのだろうか。

「やっぱ水場まわりは一段と綺麗にせんとイカンな」

「そうだな。台所と風呂場の掃除を強化しよう」

「風呂場は洗面台から洗濯機の下までキッチンとやってな」

「勿論だ」

基本的に掃除の類は俺が担当している。

はやての足が悪いのもあるが基本的に、はやては炊事関係が強いので自然とそんな役割分担になっていた。

ちなみに、洗濯は週替わりで交代制である。

「しかしこれだけ綺麗にしても出てくるのが、GのGたる所以^{ゆえん}やな」

確かに不気味なほど、いつの間にかそこにいるからな。

油断ならない……。

「まあ…今更現われた事に対してグダグダ言ってもしょうがないのも確かや。至急、ガスとトラップを購入しに薬局行くで！」

「おう！」

俺たちは、そう言うとき温かい格好で外に出る。

「コート着て、マフラーを巻いて…」

「お兄いゝ。アタシにもマフラー巻いてゝ」

「はいはい…。手間のかかる娘め」

とりあえず、三メートルくらいある長いマフラーを出して…。

「ちょ…それ長すぎ…」

ぐるぐるぐるぐる…。

「むぎゅゝ……………」

「これでよし。行くか」

「むぎゅむ（コラ（怒））……………」

寒空の下、商店街までの道のりを、“怪奇マフラー女!?”と化したはやてと共に行くのは少し恥ずかしかった。

「そういえば昔、某マンガでマシンガンでGと戦う警官の話があったな…」

「なにそれ？ 超カッコええやん…」

葛飾区のおまわりさんも大変だ。

第五話 対G戦。ゝはやて家の攻防ゝ（後書き）

はやて可愛いよはやて

第六話 はやて日記 vol. 1

今日から日記をつけることにしました。

わたしは学校に通っていない影響もあって、他の同年代の子たちと比べて字を書く習慣が少ないので、石田先生（わたしの担当医師さんやな）に勧められたのが始まりや。

最初は「三日坊主にならんとええけど…」程度に考えていたんやけど、それは杞憂に終わった。

何故なら書くことが思いのほか楽しかった。

理由は分かってる。

それは数日前にやってきた変な居候さんのせいや。

わたしよりもずっと大人やのに、ちつともそんな気がせえへん。

むしろ、わたしよりも精神年齢低いんと違うやろか？

……たぶん、間違っていない気がする。

まあ、そんな居候さんやから、一緒に居て退屈せえへん。（それに

については感謝しとるで、お兄い)

つまり、話を書くネタには困らへん。

これは、そんな居候さんこと、お兄いとわたしの日々をグダグダと書き綴った日記である。

○月 3日 晴れ

今日も暑い日々が続く————温暖化反対や。

たっぷりと汗をかいたので、シャワーを浴びることにした。

わたしが着替えようとシャツとスカートを脱いだ所で、お兄いが洗面台に入ってきた。

ノックしなかったお兄いが完璧に悪いと思う。

「立派になったもんだ……」

嬉しいんやけど、こんな時に聞きたい言葉ではなかった。

○月 22日 くもり

わたしが楽しみにしていたケーキが冷蔵庫から消えていた。

ケーキの入った箱に、＜はやて＞と名前を書いておいたにも関わらずや。

我が家のもう一人の住人を問いただしてみた。

案の定食べたのは、お兄いやった。

せっかく楽しみにしていたのに……。

お兄いのバカ……。

そういえば、お兄いにも一時期付き合っていた女性がいたらしい……。

……生意気な。

でも、相手にはあまり相手にされてなかったようだ。

モヤモヤするようなホッとしたような変な気分だ……。

×月 10日 雨

今日はあいにくの雨で、外に出られへん。

…せっかく、お兄いと出かけるつもりやったのに……空気の読めない天気や。

仕方ないので、お兄いの隠し持っていたカップメンを食べた。

ムシヤクシヤしてやった。後悔はしていない。

お兄いが怒っていたが、わたしのケーキを前に食べた事があるからおあいこである。

決着がつかなかったので、ババ抜きで勝負をつける事にした。

ジョーカーを持った時のお兄いは、挙動不審になるのでとても弱かった。

△月 2日 晴れ

ずいぶん涼しくなってきた。

……いや、少し寒いくらいだったので今日の晩ご飯は鍋にする事にしました。

野菜類が足りないので、お兄いに買い物に行ってもらう事にした。

帰ってきたお兄いは、なんや疲れたような顔をしていたが、頼んでいた野菜を買ってこなかったなので、寒空の下もう一度買いに行かせた。

なにやってんねん……。

☆月 6日 晴れ

台所の黒い悪魔こと“G”が現われた!!

何とかお兄いとの協力で倒す事に成功したんやけど…一匹が出たとなると……考えたくない!!

掃除の類はお兄いと協力する事にして、薬局にガスやら罌やらを買いに行った。

たまには少しくらい甘えてみようかとマフラーを巻いてもらおうと頼んだのだが、何故かグルグル巻きにされた。

ええ度胸しとる…。

シヤクだったので、そのまま商店街に向かった。

お兄いが、周囲の反応に恥ずかしがっていたが、わたしはそのまま商店街をお兄いと歩く事にした。

…ちょっと、暑苦しかった。

ついでに、今日の晩ご飯はなんとなく巻き寿司にした。

ウマウマ。

改めて読み返してみると、自分でも言うのも何だけど……面白い。

まったく…兄代わりのくせに情けないからな、お兄いは…。

ほうつといたら何するか分からへん。

だからしょうがないんで、当分はアタシが面倒見てあげるわ。

感謝してな、お兄い。

第六話 はやて日記 vol. 1 (後書き)

関西弁って書いていると、段々おかしくなってきたような不思議な気分になります。

“杞憂”とか明らかに小学生漢字知らんやろ。って思うでしょうが、ソコントコはスルーで…。

第七話 料理ってのは愛情が大事なんだ

突然だが、問題の発生だ。

事は可及的速やかに解決せねばなるまい。

このままでは、どんな結末が待っているのか、それを想像するだけでも恐ろしい。

それでは、説明しよう。

今俺に迫っている、問題を――――。

事の起こりはこうだ。

朝
← 寝ぼけて
← 冷蔵庫の
← プリン
←

食った

待て待て、話は最後まで聞いてくれ。

これだけならば、俺もここまで困りはしない。

食ったプリンの容器にはデカデカと油性マジックで『はやて、の』と書かれていたのだ。

なんとなく理解はしてくれただろう。

そう、はやてのプリンを食っちゃったのだ。

このままでは、はやてにどんなお仕置きをされるか分からない。

下手したら、一週間飯抜きにされてもおかしくはない。

それならそれで、カップラーメンで過ごせるから嬉しいのだが、はやては、そのカップメンすらも全て隠すだろう。

……恐ろしい。

いっそ、素直に謝ってしまうか？

いやいや、それでも結局はやては怒るだろう。

なんとかして誤魔化せないか、と考えた俺は手を打つ事にした。

幸いはやては、最近増えた居候と買い物に出かけている。

もうしばらくは帰るまい。

よし、まずは代わりのプリンを作って容器に入れてしまおう。

フタが開いていても、“間違えて食べてしまった”よりも“間違えて開けてしまった”ならば、それほど怒られる事もあるまい。

さてさて、そこでプリンの作り方だが、一体どうやって作るのか…
…それが問題である。

とりあえず、適当にあるもん混ぜてみる。

とりあえず、鍋に卵と…甘いから砂糖か？を入れてみる。

えっと…火を入れて…。

…。

…おかしい。卵焼きになった。

うん。うまい。…じゃ、なくて!!

えっと…もっと、こうフルフルしてたから、卵だけじゃないんだ
よな？

ん〜…水入れてみるか。ついでにゼリーとか入れれば、こう…
…フルフルな外見同士、それっぽくならないか？

うん。

いけそうな気がする。

下の甘^{あま}ニガの黒いのは見た目から、多分醤油と砂糖で味付けしてる筈だ。

おおっ！！

俺、料理センスとかあるんでない？

いよっつしゃ。

いっちょ、はやてに美味いって言わせてやりますか。

「ただいま」

「今帰ったぜ」

「…ただいま」

「ただいま戻りました」

「わん（帰ったぞ）」

ゾロゾロとはやてと十3人と1匹が我が家へと帰宅した。

ガヤガヤと楽しそうに、買い物での戦果を言い合いながら、居間へと入って行く。

そこに恐ろしい惨劇が待っているとも知らずに……。

「ぎゃゝゝっ!!? お兄いが死んどるゝゝゝ!!!?」

その後、人体にあり得ない顔色をした兄ばかを救急車で病院へ運んだり、事のあらましを聞いて、はやてに説教される兄バカがいたり、

今日の八神家は少し慌ただしい日でした。

第七話 料理ってのは愛情が大事なんだ（後書き）

作者も料理は詳しくありませんが、ここまで馬鹿な事はしないはず……うん、多分だいじょうぶ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5000n/>

魔法少女リリカルなのは ～時を巡るモノ～

2011年10月7日00時35分発行